

靈雲寺開山浄嚴大和尚の生涯とその行実

寺津 麻理絵

元禄十五年（一七〇二）六月二十七日、覚彦房浄嚴は靈雲寺において、釈尊の命終に同じく、頭を北に顔を西に向け、右脇を下にして横臥し、印を結び、少しの苦痛もなく静かに卒去した。六十四歳だった。

浄嚴（一六三九—一七〇二）は、河内国錦部郡鬼住村（現、河内長野市神ガ丘）に生まれ、幼児からその異能を謳われた。慶安元年（一六四八）に出家し、高野山で二十三年間修行して下山。延宝五年（一六七七）に生誕の地に葉樹山延命寺を創建し、近郷の僧俗を教化した。また、高松藩主松平頼重の帰依をうけ、四国へ数回赴いて講経、灌頂、伝授を盛んに行った。元禄四年八月二十二日、徳川五代將軍綱吉から江戸湯嶋に三千五百坪と金子を賜わって宝林山靈雲寺を創建した。元禄七年（一六九四）には靈雲寺は関八州真言律の本寺となっている。

卒業研究は、浄嚴の生涯を知るために、惟宝房蓮体撰『浄嚴和尚行状記』を翻刻活字化することからはじめた。

蓮体（一六六三—一七二六）は浄嚴の兄の亀田玄沢の子で、浄嚴の甥にあたる。出家ののち浄嚴を師としてつねに付き随い、浄嚴没後は延命寺第二代となった。『行状記』は蓮体が浄嚴の逝去からわずか半年後に書いたものであり、浄嚴と蓮体の法縁と血縁を考えれば、浄嚴の行実を知る上できわめて重要な資料といえることができる。

この『行状記』はすでに活字化されているが、蓮体の自筆本の所在が不明な現在、他伝本による翻刻活字化も意義あることと思われる。卒業論文の構成は、第一章では、まず翻刻の底本とした高野山大學図書館蔵光台院寄託本『浄嚴大和尚行状記』（一八六二年道耕書写、上下二巻）についてまとめた。ついで『行状記』を撰した蓮体の生涯を浄嚴との関係を中心に考察した。さらに『行状記』以外の浄嚴伝を取り上げ、そのおのおのについてまとめた。

第二章では、『行状記』の翻刻をもとに浄嚴の生誕から遷化まで、重要と思われる点を取り上げ、それぞれに見出しをつけて考察をした。例えば「自誓受戒」の項においては、『行状記』だけでは浄嚴がどのような思いで自誓受の比丘となろうとしたのか明確な理由が示されていないので、浄嚴が自ら撰した『真言律弁』（一六九四）の記事に注目し、浄嚴が如法の真言修行をするために自誓受戒を遂げたいと考えたこと、また、受戒にあたり興正菩薩觀尊の影響が強くあったことなどを指摘した。

卒業研究では、『行状記』を翻刻し、浄嚴和尚の年表作成や膨大な数の著作などの資料を一覧表にして整理するという基本的な作業に終始したが、『行状記』を深く理解するまでには至らなかった。今後は、力をつけて翻刻をより正確なものとし、この卒業研究を踏まえてさらに浄嚴和尚の生涯とその行実、また日本仏教史における浄嚴や靈雲寺の位置づけ等々の問題について丁寧な考察してゆきたい。

（昭和女子大学大学院）